
僕と彼らと狂戦士

牧織トト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼らと狂戦士

【Nコード】

N7554S

【作者名】

牧織トト

【あらすじ】

「よお・面白そうなことしてんじゃねえか」

私立 聖 明帝大付属高校に入学する数日前、僕は狂戦士に出くわした。

あー、なんだよもー、最悪だよー。てゆうか最悪の癖に最強ってどいうことだよー。

浮かれてこそいなかったが、新しいスクールライフにそれなりの展望を抱いていた僕に降りかかるとたばたバイオレンス(?) 「脳直」「めちゃくちゃやったれ」というのが作者のテーマです。残酷

描写有の為R15。

新しい町

東京に隣接し、山手線までは電車で約30分。一応、急行だつてとまる。

駅前には大型デパートが2件立ち並び、こだわりの無ければ大抵のものがここで手に入る。

かと思えばちょっと道を外れただけでその風景は新興住宅地の群れになり、もつと歩けば兼業農家の古い一軒家になり、小さな田んぼを挟んだりするので間隔も広がっていく。それでも時々思い出したように流行のものを取り扱う雑貨屋や、やたら近代的なフォルムをした真新しい病院が軒を連ねていたりする。気がつけば山の麓に足を掛けていたようで、舗装されていない斜面を登っている。

ふむ、なんと言っているのか、田舎というのは雑多でやや便利すぎるが、都会というにはやっぱり

やや不便な土地らしい、ここは。

ちよつと不便ではあるが、嫌いじゃ無い。

それにその不便を感じることはあまり無いだろうし、その不便は場合によっては便利な道具になるだろう。

僕は次の月曜日からここに通う。

祝日や夏休みやイベントごとなんかは概算で1年に約200日として600日 あ、でも単位制だから自分の采配で多少上下するのか。それにそのまま大学部に進学すればプラス4年〜8年なので最大で

2200日か。もともとが大雑把な数字だったし、大学部は当然休みの期間も違うから適当と表現するにも甚だしい数字だがとりあえず2200日。

長い、と思う。

良く大人は大人になると時間の流れが速くなるとか子供の1ヶ月は大人の1年とかわけの分からないことを言うが、1秒は1秒だし、1年は1年だ。過ぎた時間を長く、あるいは短く感じるのは記憶の抜け落ち、又は肉付けによるものだ。

ああでも、矛盾するかもしれないが、今現在、僕がここで経験している体感している時間は1秒でも10秒でも、果てしないように思う。右足と左足を交互に出し、目的地も無くただ歩く いまやっているこの行為は、永遠に続くんじゃないかと思う。

この感覚は、行儀良く座って黒板を見ているフリをしている時も、本を読んでいる時も同じだ。

それが”今”であれば、永遠にこのまま何じやないかという漠然とした不安に苛まれる。

いや、苛まれるなんて仰々しいものじゃないな…せいぜいがちょっとばかりずんとくる、あまりにも日常化してしまつて麻痺してしまつた不満の絞りカスみたいな微細なものだ。

そしてそんなものは、電車が無事目的地に着いたときや電話が終わつてあの”ツー・ツー”という音を聞いたとき「ああよかった、ちゃんと終りがあつたんだ」と少し安心する。

「終り?…というより区切りに近いのかもしれない」と独り言を呟いてみたりした。

とにかく僕にとって1秒だろうと10秒だろうと”今”は永遠の

ように長く、この先この町で、それを2200日も体験していかなくちゃいけないというのは、少々おつくうだ。

「くだらねえ」

とその女性は言った。

土手だ。

金八先生のオープニングよろしく、真ん中の川に向かって傾斜している芝生は緩やかで大きい、小学生がダンボールを敷いてすべって遊べるだろう。少しはなれたところには線路が通り、その下は薄暗い。コンクリートの柱にはカラスプレーでかかれた文字だが絵だか判別のつかないマーク。不良が吹き溜まりそうなスペースだ。否、実際に不良すぎる不良が、ついさっきまでそこにいたわけだが…。

「ちんたらちんたら動くから何を余所見してんのかと思えば、んなこと考えてやがったのか。てか、そんなくだらなさすぎる話をあたしにするんじゃないやねえ」

「あなたが話せって言ったんですよ…」

くくく、とその女性は喉を振るわせ「しかしまあ、多少面白くはあったぜ」と言った「いや、正確には面白そうだったってところだな。面白そうかと思ってちいと考えてみたら、結局はくだらなかった。ギリギリ落第って感じだな」

なんだか酷い言われようである。

そう、僕はつい1時間前までこんなくだらないことを考えながら歩いていた。

そして30分前にその女性に会った。
時間を戻そう、30分前に。

新しい町 - 2

場所は変わらず土手である。

おそらく今は14時位だろうか、桜が散り始める時期だ、日の光を浴びた風が心地良い。

もう10分ばかり歩いているが、誰ともすれ違っていない。去年か一昨年か、ある日突然自分以外の人間が消えてしまうなんてアメリカの映画があつたが、そんな感じだ。

「ん？」

と思つたらいた。

土手を降りた河川敷の影になつている高架下、コンクリートの柱を囲むように3人の男が立っている。

「チツ！」

嫌なものを見た。不良がする愚考としては平凡だが、胸糞悪い光景だ。

どうしよう、無視してしまおうか。僕には関係の無いことだし、もはや手遅れの可能性が高い。仮に間に合つたとしても、できることは少ない。沈んだ気分が浮上するとも思えない。

「……………はあ」

日の光を反射して風で波打つ緑の坂道を、僕は降りた。

「ああん？なんだてめえ？」

…うわ怖っ。

3人の男というのは、予想したとおり、というかよそうよりやや上をいった不良だった。

アーマーナイフを持った浅黒い大男、顔面に2桁のピアスを空けた色白の男はなんと釘バットを持っている。そしてもう一人はスキンヘッドにした頭部にでかかと刺青が入っている。多分、こいつがリーダーだ。細身に見えるのはボクシングが何かで絞ったに違いない。

「なんだって聞いてんだよ。お前何か？もしかして正義の味方か？」

「寄付じゃねえの？財布を進呈しに来てくれたんだろ」

「こいつの仲間に加わりたかったんじゃねえの？」

釘バットの男がその獲物で背後の”それ”を指した。

思わず眉に皺がよる。

「……」

「なんとか言えやあぁっ！！」

しかし、ナイフ・釘バット・格闘家の拳って…どれも人を殺せる道具じゃないっすか。

どうしよう、本当に。何で来てしまったんだろう。あーもう、無視して通り過ぎておけば明日には忘れてしまえるぐらいの不快さだったはずなのに、ちよつとした気まぐれのせいで今や大怪我との瀬戸際みたいな状況だ。馬鹿か僕は。帰りたい、今すぐ帰って母さんのあのぼんやりとした味のご飯が食べたい。大体、ちよつと相手が黙ってるからってそんな大声張り上げなくたって良いじゃ無いか。不良って奴はいつだってキレル世代なのか？

「あー……」

「あーん？」

「だから…えつとですね…」

「もういいやめんどくせ、潰して貰うもんもらって晒しとけば解決だろ」

刺青の男が、早々にコミュニケーション放棄し、僕に向かって歩いてくる。

えー。

もうちよつと粘りましょうよ。

腕力、では到底叶わない。脚力、も無理だろう、すぐに追いつかれる。携帯で助けを呼ぶ、のは愚の骨頂だ、確実に間に合わないし、なにより持つてきていない。周りには他に誰もいない。今更謝ったって許してもらえるはずが無い、てゆうか何に対する謝罪だ？

僕が一步下がっては3人組が1歩出る、まるで紐で繋いでるよう
に一定の距離を保って。きつと、僕が恐怖に耐え切れなくなって逃
げ出すのをきっかけに”楽しい狩り”を始めるつもりなんだろう。
ほんと、どうしたもんか。
と、そのときだった -

「よお」

僕の背後、5cmも離れていない距離で。

「面白そうなことしてんじゃねえか」

「っ！？」

馬鹿みたいなプレッシャーが、僕の首筋を撫で上げた。

「はっ…はっ…はっ…」

呼吸が、辛い。

なんだ?! 僕の後ろに何がいる?

怖い!

痛い!

死ぬ!

振り向けない。

震えることすらできない。

全身がパニックになってる。

まるで真正面にライオンがいて、バックリ開いた口が喉元で待機してるみたいだ。

「何だお前?」

「てゆーか、こいつ喘息みたいになってんじゃん」

阿呆かこいつら、何でこの圧力が分からないんだ!

相手が刃物を持っていたら、俺の体から刃の切っ先が飛び出さないのが不思議なくらいだ。

相手が銃を持っていたら、打ち抜かれて俺の服が赤く染まっっていないのがおかしいくらいだ。

ああそうか、後ろの奴。

殺意で、遊んでる。

「ククッ」

「っっ!」

ぶちり、と頭の中で何かが切れる音がした。

『うわああああああああああああああっ!!!!』

『!』

新しい町 - 3

「あんた…誰だ？」

「お？すげえな。あんなのでつかい声出しといて声が潰れてねえのかお前？つーかこの情況、分かりやすすぎるな。差し詰め少年は正義の味方つてわけか」そういつてその女性は不良3人組の後ろを覗き込む「ん？アレか？ アレだな。くくく、愉快愉快」

ポンポン、と2回頭を撫でられた。僕は今、あの声の主と向かい合い、見上げる形で尻餅をついているのでちょうど良い高さだ。

美女…だった、それとんでもない。

芸能人とか絵画とか、そんなものとは比べ物にならない、畏怖さえ感じさせるほどの美人さん。奇跡みたいな顔の作りだ。

そして、どこか禍々しいオーラを身に纏っている。

でも先ほどのような爆発するようなプレッシャーではない。

いや、冷静に思い出してみれば、さっきのだって今のとたいして変わるものではなかったはずだ。じゃあ…

僕はなんであんなにも異常に怯えたんだ？

それこそ恥や外聞は愚か、喉も心臓も擦り切れんばかりに悲鳴をあげた。

誰…ていうか何なんだ？

この人の何が、僕の何をブチ切れさせたんだ？

てゆうか、今こいつ何した？

「おいっ！」という声と共に何かを叩く音が聞こえ振り返ってみれば、釘バットがどうやらそれをジャリに振り下ろしたようだった。苦痛に顔を歪ませて、開いた手で片方の耳を塞いでいる。

「いきなりバカでかい声を出しやがって、無視してんじゃねえ」

「ふざけやがって」

「てゆーかダメでしょう。おねーさんみたいな美人がそんな格好でウロウロしてちゃ」

「絶対誘ってるでしょ」

「誘って無くてももう手遅れだけどね」

「まずはその綺麗な姉ちゃんを縛って、こいつをボコって、イイことしてんのを見せて勉強してもらおうよ」

「性教育だよ、ハッハー」

事前にやることを予告してくれるのか、親切だな　じゃなくて！
このままだと目の前の女性が巻き添えになってしまう。

「あ、あの、どこのどなたかは知りませんが、巻き込んでしまっ
たようですみません。本当に、この人達が言うようになったらお詫
びのしようがありません。ここは僕が何とか引き付けて…みるので、
できるだけ遠くへ逃げてくださ」

僕が今後の人生で2度と使うことはないであろう一大決心して放
たれた恥ずかしいセリフは、最後まで言い切ることはできなかった。
かわりに、後頭部への衝撃と持ち上げかけた膝の再びの着地。
痛痛痛痛痛痛痛！！痛って！

音からして手のひらでハタかれただけのようだったが、水を入れ
たたらいが落ちてきたかのように痛い！あ、涙が…

「何キモいこと言ってるんだお前、的外れな上全然似合ってないぞ。
それに礼儀がなってねえ。誘ってくれてるんだから誘われてやろう
ぜ」

「な、何を…」

「あたしがあいつらをよがらせて喘がせてるのを、楽しく見学し
とけって言ってるんだよ」

「い…」

陰魔、という単語が思わず口に出そうになったが、慌てて引つ込める。不敵に上がった口角とダダ漏れのフェロモンが、まさしくそのとおりに思えたのだ。

「は、ははっ」刺青男が笑いながらジャンプして、クルクル2・3回その場で回転した「お姉さんかつこいいっ！ギャハハ、すっげえ！何！空手？少林寺？カポエラ？負け知らず？惚れた！惚れた惚れた惚れたっ！」

へ、変態だ。

いまだ後頭部の痛みから回復しきれていないが、後ずさる僕。残り2人の不良はニヤニヤと気味の悪い笑いを浮かべている。しっかりと自分達のペースを取り戻したようで、喜ばしいことだ。

惚れられた美女は、先ほどの陰魔な微笑を保ったままである。

「テメエはボクシングだろ。筋肉の付き方からしてたいしたことなさそうだけどな」

言われた刺青男は、ますますその笑みを深くする。

「ああすげえイイ、すげえイイよあんだ。何がイイって、アンタみたいな美人で自信過剰な女が、3分後には俺に組み敷かれて泣きながら喘いでるってことを想像すると、すげえ興奮する」

「ククク、言うだけフラグが立っつてもんだぜ。お前は、お前らは！どんな道具を揃えようと、どんな状況を作ろうと、奇跡が起ころうと、神託があるうと、万が一にも、63億人が1にもあたしに勝つ道理はねえッ！！」

突然！というより当然。その言葉をきっかけに刺青男が美女に向かって走り出した。

拳を構え、腰を低くしたままのトップスピード。

やはりボクシングだ、しかもケンカ慣れした。まずい、せめて間

に

「っ！？」

動かない！？膝？後頭部の打撃か。くそっ、まだ回復してないのか。

「はっ」

小馬鹿にしたように美女が笑い、拳を突き出す。が、ダメだ。出すタイミングが遅すぎた。クロスカウンターのように見えるが、腕の長さも違う。美女の腕は、届くはずが無い。

「…え？」

新しい町 - 4

「っぎゃあああああつ!!」

何：が起こつた？いや、見えてはいた。この美女、向かってくる腕に自分の腕を巻きつけてそのまま刺青男の顔面を掴み、持ち上げると同時に巻き込んだ相手の肩を外したんだ。

センスも凄いがなんつーパワーまかせ。

圧の入った腕との力比べで負けていれば自分の肩が脱臼してたはずだ。おまけにそのまま持ち上げるなんて…。大体、重量上げだつて勢いをつけて自分の真上に重りを持つてくるから可能なのであつて、持ち上げて伸ばした腕を斜め上に長時間固定するなんてこと普通はできるはずが無い。

「い、い、いいて、えええ」

「うるせえ」

「離せやコラア!!」

「くたばれえ!!」

ナイフ男と釘バット男が同時に獲物を振り下ろす。刺青男ほどの実力は内容で大降りで単純だったが、当然ケンカ慣れしているようで、しかも側面と正面からの同時攻撃。でも僕は、もはや手を出さうなんて考えもしなかった。

「うぐっ」

「おお」

僕の予想通り心配する必要は全くなかったわけで、美女は正面から向かってきたナイフ男の顎に強烈な蹴りを入れて昏倒させ、横から振り下ろされる釘バットを素手で受け止めた。一度もその獲物を見ることなく、釘と釘の隙間に指を通して。

「う…あ…」

恐怖から獲物を離し、釘バット男が回れ右をして逃げようとしたが、美女がナイフ男を蹴り上げた足を下ろすことなくそのまま釘バット男の胴体にぐるりと巻きつけ、地面に仰向けに踏みつけた。

その時になって初めて気付いたが、砂利の上に美女は裸足だった。

圧倒、される。

たまたま敵ではなかったが、例え敵でも僕は彼女の戦いを美しいと思うだろう。

「少年」

「…は、はい」

「そこにある、ビニール袋があんだろ」

確かに、美女の指差すほうを見てみれば、1mほど離れた所にビニール袋があった。

駆け寄って中身を見てみれば、色々な駄菓子が入っている。

「ありますね」

「わたあめを取ってくれ。そろそろこいつの意識がやべえ」

「…」

こいつ、というのは未だに美女の腕の先にぶら下がったままの刺青男のことである。

当然だ。もう1分近く脱臼した肩をねじり上げ、頭部を掴まれて持ち上げられているのだ。バスケットボールを指先に力を入れて片手で掴む要領と一緒にだが、支えているのは人間1人の体重なのだ。めり込んだ皮膚は破けていないものの、一部の血流がせき止められているのは必須である。

描写こそ無かったもののこの刺青男、しっかりと痛みで絶叫し、悪態を付き続けていたが、2人の仲間が倒された振動で痛みが臨界点に達し、意識が危うくなったようである。

ちなみに地面に倒れた釘バット男は青汁と赤ワインを混ぜたような顔色で、恐怖で過呼吸に陥っている。完全にパニック状態だった。

脱臼1名、意識不明1名、戦意喪失（無傷）1名。

僕が受けたかもしれない、美女が受けたかもしれないダメージを考えれば、いぶんな恩情だろうが、残酷すぎるかもという考えが頭をよぎる。

美女が、刺青男を下ろしていく。

刺青男の足が地面につき、絡めた腕がずりりと抜けていく。

と、その瞬間、刺青男が崩れ落ちるよりも早く、美女が奴の無事なほうの方をポーンと叩き180度回転させ、その腕を巻き込む形で背後から片腕で抱きしめた。

脱臼した肩の痛み刺青男が低く呻く。

まだ続きがあるのか、とたまらず僕も呻いた。

美女が空いている手をひらひらさせるのでわたあめの袋を渡す。

歯を使つて開封しながら美女が言った。

「わたあめてのはこの世で最も詐欺な食い物だと思わねえか？このちっちゃつでも30円、縁日の屋台もんは500円だ。割り箸が1本、10gにも満たねえザラメ、材料費が5円程度の袋。あとの490円は何だ？あのアニメな袋のデザインのなんとか権的なやつか？それとも食感か？」

「さ、さあ…何なんですか？」と僕が問うた。

「知らん」

「知らねえのかよ。」

まあ、縁日の出店って大体が300円か500円で統一されてて、例外なく暴利だしな。「でもお祭りだから」と不当さを感じつつあって畏に嵌ってる感はある。

「でもあのふわふわが楽しくて買っちゃまう」

そうだね、うん。

「…許して…見逃して…」

「おいうるせーぞプリントハゲ、今この章の、一番重要なテーマについて話してんだろぅが」

読者の為に言っておこう、今も含めこの先も、絶対にこの話題がテーマになることはない。

「しかし馬鹿だなてめーら、仮にあたしらが何の変哲も無い2人組でも、どうやたつててめーらが勝つことなんかできるわけねーだろ、そんなことも分かんねーのか」

「分か…ない」

「第一話に登場する強気で名無しの不良なんざ、やられるに決まってるんだろっ!」

「だから言うだけフラグが立つって言っただろぅが」と吐き捨てる美女。

「何…言って…」

本当に、何言ってるんだろぅね!

「許して…くださ…」

美女が、盛大なため息をついて、声のトーンを下げて言った。

「馬鹿のひとつ覚えみてえに…大体な、自分は見逃すつもりがねえのに、見逃してくれなんて都合がいいとは思わねえのか?」

刺青男の体がブルリと震えた。

「てめーらの獲物がボクシングの拳とナイフと釘のついたバット。あたしらがまともにやられたとして、概算しても1人頭骨折3打撲10穴が10箇所に切り傷3、1ヶ月の入院にトラウマ。下手すりゃ腱が切れて後遺症が残るってとこだろ。あ、でも女にやそこまでしねえか。まわしてんのをビデオでとって、脅して金を巻き上げるってとこかな」

具体的に言われて僕がブルリと震えた。

そして、後ろにいるから見えないが、刺青男が齒がガタガタと鳴らしているのが分かった。

「これに釣り合わせるにはどうすればいい？同じくらいの怪我を負わせて、ソツチ系の兄ちゃんに回させて、ビデオをちらかせて金をせびればいいのか？それで釣り合いは取れんのか？取れねんだよ。てめーらをばこる労力、男を手配する労力、ビデオを回してダビングする労力、それにかかった時間と手間と経費、プラスつまんねえことをさせたあたしに対する憂さ晴らし。それらを払って初めてバランスが取れるってもんだろ」

…悪魔だ。

むちゃくちゃな理屈だ。

極悪非道すぎる。

ついに、というか当然、刺青男が命乞いを始めた。

「っ許してくださいっ！…見逃して！！」

脱臼の痛みもなんのその、全力でもがいて拘束が解ければ土下座ならぬ土下寝し、足を舐めそうな勢いである。

それに対し美女は、

「いいよ」

と明るい声で、実にあっけらかんと答えた。

「え？」

「あたしの時間を、てめーらが払えるわけねえからな。仮に払えたとして、やっと0ってことだろ。別に得るもんはねえし、なにやりつまらねえ」

「あ…じゃあ…」

「くくく、怯えんなよプリントハゲ。まあ今回は運が悪かったみてえだが、これからもケチな不良をまっとうしろよ。」

「え…あ…はい」

「あたしは寛大だかん、この位の譲歩はしてやるさ。機嫌がいいとき限定だけだな。でも3回目はダメだぞ。3回目はダメだ」

「はあ…」

そこで美女はむしゃり、とわたあめを半分食べた。

解決…なのだろうか？

僕と美女は無傷で上々だが、残酷極まりないトラウマのスタートラインに立たされたようで、見ようによっては大損した感が否めない。

しかし、場の空気は影になっているこの高架下にも、まるで午後一番日があたっているかのように明るい。

解決…したのだ。

「あ、そうそう」美女が思い出したように言った「いかんいかん、わたあめの話だった」

ずるっ、とこけた。

僕が。

「わたあめの食いごちはい。たまらんもんがあるな。暴利だが、買っちゃおう」

「そ、そうっすね」

刺青男がこびだした。

「だろ。あたしはな、わたあめを口ん中に入れた後、溶けきる前に20回噛むってことに挑戦してんだ。まだ15回しかできねえけどな」

「すごいっすー！」

すごいのか？しばらく食べた記憶が無いのではつきりとはしないが、そんなことに挑戦している時点であんまりすごくない気がする。てゆうか、僕もう帰っていいですか？

「まあな、でもなかなか上手くはいかねえ。唾液であつという間になくなっちまう。知ってつか、わたあめってのはな、例えそれが涙1滴であろうと、それが液体であればビックリするくらい一瞬で解けて、小さくなっちまうんだぜ」

「は、はい…あの、もうそろそろ腕解いてもらっていいですか？肩が痛くて…」

「ん？そうか、悪い悪い。つまりだな、それがわたあめだって話だ。そんじゃまあ、長々とご苦労さん」

「あ、いえ。そんな…」

「そんじゃまあせつかくだから景気づけだ」

そこで美女は、拘束している腕をゆっくり解き、刺青男の耳元に口を寄せた。

「最後に一発、喘いでいけや」

「え？」

緩みきつた刺青男が振り返った眼球の先には。

残り半分の、わたあめがあつた。

「つぎやあああああああつ！！！」

刺青男が絶叫する。膝を付き、必死でわたあめをはがして、まぶたを押さえながらゴロゴロと転がりまわった。

「かかか、悪いなプリントハゲ。100%砂糖だから失明するこ
とはあるめえよ」

「てえええめめええ！！！」

美女は跳ねるようなステップで刺青男を避け、コンクリートの壁へ向かう。僕が3人組を見たときに奴らが囲んでいたところ、奴らと初めて対峙した時に、一番最初に視線を移した、その先である。

「んー、こりゃ死んでますな」美女が無感情に言った「こうもミンチじゃ犬か猫がよく分かんねえが、とつくに死んでたことは確かだ。死後1時間以上は経ってんじゃねえか？ かがか、無駄な努力だったな、少年」

僕は肩をすくめるにとどめる。

「しばらくは目も開けらんねえだろうな、釘バットにでも…おい、あいつ気絶してるぞ」

あ、本当だ。

「ま、あのままゴロゴロ転がってりゃあそのうちどっちか起きんだろ」

「殺す！！殺す殺す殺す殺す！！！！」

「おーおー、怨め怨め。そんで次はもちつとましなことで来いよ　それに、3回だぜ」

そこで美女は、回れ右をし、僕の肩に腕を回した。

「じゃ、行こうぜ」

「…」

僕もう帰っちゃダメですか！

新しい町 - 5 (前書き)

新しい町、終了

新しい町 - 5

時間を戻して1時間後…。

風はいくばくか冷たくなり、日は西へ、土手の向こう側にはランドセルを背負った子供達がちらほら見え始めている。

「……………はあ」

「…あたしの横で堂々とため息つくたぁいい度胸だな」

「……………はあ」

慣れました。というか開き直りました。

「さっきのことをいろいろと思い出してたんですよ。やりすぎも甚だしい。あいつら絶対仲間を引き連れて報復しに来ますよ」

「来たら来たで別に困りやしねえよ。もしかしてお前、あいつらの数が増えたからって、あたしが負けるとでも思ってたのか？」

「いや、あなたが規格外に強いってことは見てて十分に伝わったんですけどね、あいつらもそれを分かっているからこそ、次は卑怯な手を使ってくるかも知れないじゃないですか」

「だからそんな心配すんなって。見てたからわかんだろうが。自我自賛じゃなく、あたしは真正銘強いんだよ」

ほれ、と駄菓子を渡された。

パチパチくん、コーラ味。

ちなみにパチパチくんというのは、平面型の味つきのわたあめの中に大き目のザラメのようなものが練りこまれ、それが口の中に入れるとパチパチとはじけるお菓子である。

「……………」

これがあの刺青男の目に入ってなくてよかった。

「てゆーかよ、何でさっきからあっち向いて話してた。普通会話つてもんは正面向くか、相手のほうを見て話すもんだろ」

「できるわけないでしょう。見た瞬間から言おう言おうと思ってたんですけどね、何でそんな格好してるんですか！」

そう、いろいろありすぎて今の今まで触れてこなかったが、僕がこの美女のことを『淫魔』と連想させた要因は、まずはその格好にあった。

所々が大きく、きわどく裂けている水色のツナギ。しかも着ているのは下半身だけで、上半身の部分は後ろに垂らし、両袖をへその下でひと結びにしている。じゃあ上半身はどうなんだという、スポーツブラ一丁であった（最初は水着かとも思ったが、水着であつて欲しいという期待も込めて何度か見たが、紛れも無くスポーツブラだった）。Eカップくらいはありそうだが、そのサイズのスポブラがあるとは驚きだ。ついでに言つと、裸足だった。

美女が今日一番の無垢な顔で「ん？」と首を横に倒す。

「……………いえ、いいんです」

さっきの相手は好戦的な不良だったわけだが、これじゃあ誰でもどうぞ襲ってくださいと言つてるようなものである。

わーすげえ、前屈気味で座つてても腹の肉に切れ込みが入らないのか（これは男子ならともかく、腹筋が付きにくい女子としては結構珍しい。いや決して見慣れいるというわけではなく、妹から聞いた知識だ）

「あ、そうだ」美女が、思い出したように切り出した「さっきの時間の話だけだな」

「時間？」

「ほら、言つてたじゃねえかよ、なんか中二っぽいこと」

「…ええ」

「ん？何だ？何か急に顔がどんよりしたな」

「いえ、そんなこと…えっと、確か1分は1分、1年は1年つて

頭では理解していても、心のどこかで今現在やってることが永遠に続くんじゃないかっていう感覚に陥るとかそんな話でしたね」

「そうそれ。あれからちいと思考してみたんだがな」美女が、頭の後ろで両手を組んで芝生の上に寝転がった「あたしは、お前みたいに今の状態が永遠に続くなんて考えたこと無いが、それこそ永遠と変わらないくらい遅く感じることもあるぞ」

「遅く？」

「ああ。相手が喋ってんのが遅え、向かってくる拳があたしに届くまでが遅え、物を投げてもらってあたしの手収まるまでの滞空時間が遅え。その間にひと眠りできるんじゃないかって程にな。1年だろぅが1秒だろぅが、遅くて遅くて腸が煮えくり返る」

ヒヤッ、と何かが背筋を撫でた気がしたのは気のせいだ。

しかし、『永遠』と『永遠のように遅く』か。

似ているようで全然違う、円と線くらい違う。

まあ僕の『永遠』っていうのは、正真正銘の錯覚なんだけれど。

「取ってやろぅか？」

「え？」

「その『永遠』っていう感覚をだよ。お前の感じる1秒を、時計が刻む1秒と同じにしてやる。20秒で済むぜ」

獲物を捕らえる猛禽類みたいな目が、斜め下から僕を見ていた。

「それは……」

どういうことだろぅ。

この感覚は、別に生活に不便を感じたり、何かに支障が出るレベルのものじゃ無い。

でも僕に”個性”と呼べるものができてから何年も、そして多分これからも、下手すると一生頭の隅にあり続けるであろう小さなしこりだ。

そう、しこりだ。

しこりは、無いほうが良い。

だけど僕は、このしこりを捨てたいと思ってるのだろうか。

「それは……いいです」

「あつそ」

そのまま美女は眠るようにまぶたを閉じた。

と思つたら2秒後にバチツと目をかつ開いた。

バネつきか！っていうくらいの勢いで起き上がったかと思うと、あくせくと半裸状態だった上半身の服を着だした。

夕日の下でもはつきりと分かるほど頬がほんのり色づいている。

なまじ今までの行動を目にしているので、はつきり言つて気持ち悪かった。

「変じゃないか？」なんて言いながら必死になつて髪を手ですいている。

????

「じゃ、じゃああたしは帰るからよ、お前はそうだな。あ！あれ、見えんだろ、3人組とやりあつた高架下。あん時の犬だか猫だか放置したまんまだつたから、黙祷して行け、5分ぐらい」

「え？え？」

「5分だからな！あたしの分も入つてんだからしつかりカウントしてきつちり祈つとけ！いいか、絶対に振り返ったり目え開けたりすんじゃねえぞ」

お得意の怪力で両手を固定されたり（ミシリ）、首を曲げられたり（ゴキツ）するものだから、仕方なく言うことに従う。

（目を閉じているので気配でしか判断しようが無いが）美女は僕の鼻先で薄目を開けてやしないかとたつぷり確認した後、「じゃあな！」と言つて駆けて行つた。

そもそもが裸足だったし、あの脚力だ。足音はすぐに聞こえなくなつた。

…見たい、ものすごく振り返りたい。

あの露出趣味、オラオラ系な口調、絶対的な自信、人の眼球にわたあめを押し込むような残忍さを持つ変態美女がキャラも投げ打って隠したかったものとは何なのだろうか。

欲求虫が腹の中をのた打ち回っているかのようなのである。

僕はかつて、これほどまでに何かを強く望んだことがあっただろうか。

気が狂いそうだ。

振り返ってるのがばれたら何をされるのだろうか？

何を眼球に詰められるのだろうか？

ああでも……いやしかし……。

チラ……ッ。

ガクッ！と僕は脱力してその場で四つんばいになった。

果たしてその視線の先には……土手の先にある車道に1台の汚い軽自動車が停まっていて、それに体重を預けるように立っている男の胸に飛び込んでいく美女の姿があった。

く、くだらない。

「はあ……帰ろ」

それから30分後、疲弊して帰った僕は家族全員から「あれ？何か声変じゃない？」という指摘に曖昧に答えを返し、無事母さんのいつものぼんやりとした味の夕食を食べることができたのだった。

……先行き不安だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554s/>

僕と彼らと狂戦士

2011年10月8日22時06分発行